様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ３１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０４７１

研究課題名（和文）ソシュール『一般言語学講義』の成立過程の文献学的研究

研究課題名（英文）Philological study on the making of Saussure's "Course in general linguisticséral linguistics" of Saussure

研究代表者
松澤　和宏（MATSUZAWA, KAZUHIRO）

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：３０２１９４２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：ソシュール『一般言語学講義』の成立過程の文献学的研究の成果として、フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』」（岩波書店）を刊行した。『『一般言語学講義』』の生成過程に最も関係の深い第三回講義の校注・訳をほぼ終えつつあり，2017年度中の刊行を予定している。この研究の成果の一端は、フランスとスイスで刊行された論文集や雑誌にも収録されており、ジュネーヴ大学での国際シンポジウム（2017年１月）では研究発表を行った。 2016年 12月には、名古屋大学にて３名の著名な研究者を招聘し、国際シンポジウムを組織し、　研究発表も行った。

研究成果の概要（英文）：I published as a critical edition of Saussure's manuscripts "Ferdinand de Saussure Writings in General Linguistics I "(Iwanamishoten) in 2013. Thi third course in general linguistics on which the "Course in general linguistics" was based mainly will be edited in 2017-2018. On the centenaire of the publication of the "Course in general linguistics", I organised a international symposium on Saussure at Nagoya University in 2016 and published articles in foreign academic journals from 2013 to 2016.

研究分野：言語学

キーワード：一般言語学　記号論　文献学　言語思想史　言語哲学

１．研究開始当初の背景

ソシュールの名前が冠せられている『一般言語学講義』がソシュールの死後３年目にあたる 1916年に刊行されて１００年を迎え、２０世紀の人文学に多大な影響を与えたこの著書をどのように評価すべきかという問題が研究者の間で意識されるようになった。また1996年にはソシュールの自筆草稿「言語の科学」がジュネーヴのソシュール邸で発見されて、ソシュールへの関心とともに『一般言語学講義』成立過程の研究の機運が高まった。小松英輔元学習院大学教授によるソシュール「一般言語学講義」の聴講ノート刊行（パーガモン社）の協力者としてソシュール文献学にすでに携わってきた者として、二人の弟子の編著書『一般言語学講義』の成立過程には深刻な問題が存在していることにはかなりの確信があった。すでに一般言語学講義』成立過程に関しては、編著者たちの書簡などを分析して執筆過程を世界で初めて明らかにした論文（「ソシュール『一般言語学講義』の生成批評研究にむけて - 「第3回講義」の変容をめぐって」名古屋大学文学部研究論集、文学 44. 1998年.後に『生成論の探求』名古屋大学出版会，2002 年に再録）を発表している。

２．研究の目的

ソシュールの名前で刊行された死後刊行『一般言語学講義』は、２０世紀の言語学や人文諸科学に多大な影響を与えたが、その成立過程には、重大な問題を残していた。なぜならば一行としてソシュールはこの書物を執筆していないからである。それどころかソシュールは晩年にこのような書物を刊行することなど考えられないと学生の一人に語ってさえいたのである。事実　1996年に発見された自筆草稿などにも言語科学への懐疑が語られており、ソシュールは明らかに言語の科学が抱える困難に直面していた。ところが二人の弟子はソシュール没後すぐに第三回講義を元にした再構成に取り掛かり、わずか二年余りで『一般言語学講義』執筆編纂したのである。しかしソシュールの実際の一般言語学講義と『一般言語学講義』との間には構成上の相違ばかりではなく、本文の細部にわたって多くの相違が見られる。こうした問題は『一般言語学講義』の２０世紀における成功によってかえって隠蔽される形となった。ソシュールが晩年に直面していた困難を明らかにするためにも、『一般言語学講義』との相違を明らかにすることは、極めて重要であり、それはまた、ラングの言語学や共時言語学を特権化してきた20世紀の言語学のあり方への批判的反省を促すことにもつながるはずである。とりわけ我が国ではソシュールはもっぱら現代思想家あるいは哲学的思想家として取り上げられ、「言語論的転回」の原点に位置付けられてきた。しかしこのような評価自体が、『一般言語学講義』の用意したラングの言語学の特権化のもたらした結果なのではないかと考えられるのである。

３．研究の方法

ソシュールが晩年に三回にわたって行った一般言語学講義の学生による聴講ノートや自筆草稿の校訂版（校注・訳）の作成・刊行を元に、成立過程を明らかにしていく。とりわけソシュールの第三回講義は『一般言語学講義』が最も多くを負っているので、最重要文献と言える。その際に可能な限り詳細な言語学的な注を付すように心がける。これまでエングラー版などには注がほとんど全くなかったからである。また研究成果を積極的に国際的に発信していく。

４．研究成果

４年間の研究成果としては、以下のことがあげられる。

（１）ソシュールの一般言語学講義に関する自筆草稿に関しては『ソシュール一般言語学講義著作集 I自筆草稿『言語の科学』』(岩波書店）として校注・訳の校訂版を刊行した。晩年の一般言語学講義の準備メモが多く含まれているばかりではなく、ソシュールが 1890年代前半においてすでに言語記号の本質やラングの性質に関して深い洞察を行っていたこと、また同時代の言語研究、特に失語症の研究に深い関心を寄せていたことが確認できた。

（２）また第三回講義の聴講ノートの校注・訳の刊行も、当初の予定よりかなり遅れてしまったたとはいえ、今年度中に刊行予定である。

第三回講義の校注・訳の作業の過程で明らかになったことは、第一に、第三回講義の第一部「諸言語」が講義の約三分の二を占めるばかりではなく、言語理論の観点からも重要な意味を持っていることである。世界の主要語族を歴史的あるいは地理的多様性に即して扱ったこの部分は、『一般言語学講義』では大幅に縮減され、しかも第四部「言語地理学」に移されてしまっている。そのために第三回講義における第一部「諸言語」から理論的な第二部「言語」への移行プロセスが『一般言語学講義』ではほとんど見えない構成となっている。このことは弟子たちの編集執筆方針がもっぱら共時的ラングの言語学を高唱することにあったことと深く連動していることが判明した。ソシュールは、単一言語の体系的研究を特権化することなく、諸言語の相互干渉に多くの講義を割いており、今日の社会言語学が注目する言語接触の問題に取り組んでいたことが判明した。このことはラングをめぐる理論的な部分にも様々な影を落としており、ソシュールにとってラングは決して自明な存在ではなかったことが明らかになった。

第二に、ソシュールはラングの言語学とと

もにパロールの言語学をも構想していたことである。ソシュールの二つの言語学の構想は、『一般言語学講義』では言語学の真正な対象はラングであるという末尾の有名な一文が端的に示しているように、全く無視され、改竄的編集と執筆がなされてしまったのである。これは20世紀の言語学全体の動向を決定付けてしまったと言ってもおそらく過言ではない。プラーグ学派や社会言語学、語用論などによるソシュール批判は、こうしたソシュールの構想をラングの言語学に矮小化した『一般言語学講義』への批判であったことが確認できる。しかしながらこのことはソシュールのラング概念が重要性を失うことを意味しない。経験主義的実証主義的な言語研究しか存在しなかった 19 世紀後半においてラング概念を導入して言語の科学を樹立しようとした意義は決定的に重要である。このラング概念を科学的言語理論の試みとして理解せずに、経験主義的に実体化してしまったところにソシュール受容の最大の問題があったことが判明した。

（３）この研究期間中に『一般言語学講義』の刊行１００年を記念する四つの国際シンポジウム（中国、フランス、スイス、日本）に、組織責任者として、あるいは研究発表者として関わったが、そこでの研究者との意見交換を通して、多くの点で学ぶところ、刺激を受けるところがあった。第三回講義の校注・訳の刊行が遅れた理由は、『一般言語学講義』刊行１００年にあたる2016年から　2017年初頭にかけて、三つの国際シンポジウム（パリ第３大学、ジュネーブ大学及び名古屋大学）に、査読委員、研究発表および組織責任者として関わったためである。上記のように、とりわけ認知言語学とソシュールとの関わりについては、これまであまり考えてこなかったテーマであり、このような観点からソシュールの一般言語学講義や弟子による『一般言語学講義』の成立過程に光をあてることができることを認識しえたことは大きな成果でもあった。とりわけ思考と言語の関係をめぐっては、これまでのソシュール研究の通説である言語決定論を批判的に越えていく展望を具体的に得ることができた。こうした点はすでに名古屋やジュネーヴでの研究発表にも反映されている。

（４） 研究期間の4年間に国内ばかりではなく、フランスやスイスで論文を複数刊行することができた。「近年のソシュール研究の動向ーテクストへの回帰」（日本フランス語フランス文学会 web Cahiers, 2014 ）では、近年のソシュール研究の特徴が、ソシュールの書いた自筆草稿や学生の聴講ノートを元にした文献学的研究にあることを具体的な研究事例を挙げて説明した。そして今後の研究展望として、文献学的研究を踏まえて、ソシュールの多面的な関心や同時代的なコンテクストを総合的に捉えることが求められてきていると結論した。ソシュールの自筆草稿「言語の二重の本質について」を論じた雑誌掲載論文(2013年）は書評の対象にもなり、さらに書き改められて同じ題名で論文集として 2016年に刊行された。ソシュールが言語の科学の叙述の順序をめぐって遅疑逡巡していたこと、相互前提の悪循環に直面していたこと、第一原理から演繹的に展開されるような理論体系は言語の科学では成立しないのではないかという懐疑を書き留めていることなどを明らかにした。また2017年1月のジュネーヴ大学での発表では、従来全く気づかれてこなかった『一般言語学講義』のいわゆる「パロールの回路」の図式において、パロールの動きを示す線が二人の対話者の脳にまで延長されているのは、『一般言語学講義』の編著者の手によるもので、聴講ノートでは耳のところで線は止まっていることを明らかにした。編著者の改竄は、ラングを脳の活動に因るものとする当時のブロカなどの大脳局在説の影響である。ソシュールは脳の重要性を認めつつも、ラングの社会性をやはり重視していたと考えられる。また価値論の有名な図式（言語の単位の発生を大気と水面の間に生じる波に例えた有名な一節）がソシュールの実際の講義とは異なることを実証的に明らかにした。言語決定論の温床となり、後代に多大な影響を与えたこの図式が、弟子たちの改竄に基づくものであることを明らかにしたことが高い評価を受けた。この発表の全文はスイスで刊行される予定である。2016年１２月に名古屋大学での研究集会では、恣意性概念の揺らぎを問題にして、シニフィエと概念との関係に焦点を当てることができた。この研究集会の記録は今秋『２１世紀のソシュール』（松澤和宏編著、水声社）と題して刊行される予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

1) Kazuhiro MATSUZAWA « Trois remarques philologiques » , Le cours de Linguistique General 1916-2016 : L'Emergence, Cercle Ferdinand de Saussure, 2017, 169. (査読有)

2) Kazuhiro MATSUZAWA « L'ordre le cercle la réflexivité dans les manuscrits dits De l'essence double du langage de Ferdinand de saussure » , De l'essence double du langage et le renouveau du saussurisme, Lambert-Ducas, 2016, 107-122（査読有）

3)松澤和宏「生成論　/本文研究」、『日本近代文学研究の方法』（日本近代文学会）、2016, 47-58.　（査読有）

4) Kazuhiro MATSUZAWA « In Memoriam EISUKE KOMATSU » Cahiers Ferdinand de saussure, 67, 2015, pp.289-291. (査読有)

5) 松澤和宏「 近年のソシュール研究の動向ーテクストへの回帰」、日本フランス語フランス文学会 web Cahiers, 2014, 1-8 （査読有）

6) Kazuhiro MATSUZAWA «L'ordre le cercle la réflexivité dans les manuscrits dits De l'essence double du langage de Ferdinand de Saussure »、Arena Romanistica, 12, 2013, 12—136. (査読有)

〔学会発表〕（計 6 件）

1) Kazuhiro Matsuzawa « Saussure et la philosophie médiévale », 南京大学、2013.

2)Kazuhiro MATSUZAWA, « Vers l'édition génétique des manuscrits de Saussure à partir des travaux de Video NOMURA et Eisuke KOMATSU », Institut des textes et manuscrits modernes, 2016.

3) 松澤和宏、ソシュールと『一般言語学講義』、思想学会、愛知大学言語学懇話会、2016 .

4) 松澤和宏 「二つのドクサについて」、日本フランス語フランス文学会秋季大会（東北大学）, 2016.

5) 松澤和宏「ソシュールにおける恣意性概念の揺らぎについて」、名古屋大学文学研究科人類文化遺産テクスト学研究所, 2016.

6) Kazuhiro MATSUZAWA « Trois remarques philologiques » , Le cours de Linguistique General 1916-2016 : L'Emergence, Cercle Ferdinand de Saussure, 2017.

〔図書〕（計 1 件）
松澤和宏校注・訳、『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』岩波書店、 2013 , 575.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
名古屋大学文学研究科教授
松澤和宏
（ Matsuzawa Kazuhiro ）

研究者番号： 30219422

(2)研究協力者

〔その他の研究協力者〕
( )